

金曜日

金曜日はわろき日なりと、西の國にはいひ傳ふるよし聞けど、此頃の此日は、我等が爲にいと楽しき日なり。そは一週に一度、ケーベル博士の來給ひて、教へ給ふ日なればなり。今日も其楽しき日にて、師の君今入りおはしたり。誰よりか始むると問はせ給ふに、ベindelがカスカデー。シヨパンがブラーデなど、つきづくに人々ひき給ふ。

こゝは、そこは、など師の君の折々ひき聞かせ給ふを、かたへのオルゲルのはしによりゐて打聞くほど、おのが教うべき時は來りぬ。今日の課にいかなるコダをかつけんとする、いざと師の君そののかし給ふ。例の心おくれする折しも、かたへの人に おし出されて、やうくピアノに向ふ。ベートーフンがコンセルトの終の章を、辛くして弾きをへつ。次の課には何をか望むと問ひます。師のおぼし給ふまゝにといへば、シヨパンやシューマンやと、かたへよりいふ人あり。否、それらはわが一生のうちにひき得んとも覺江ずといへば、さても慾なき人かなと笑ひ給ひて、さらばルビンスタイン、リストなどはと問はせ給ふ。いで、そは我後の世までも思ひもかけ侍らぬことゝ答ふ。をかしがり給ひて、さらばモツアルトが幻想の曲をこそ、これにて君の胸の底なる幻想や聽かんと給ふ。いと覺束なきわざかな。ノートよむだにむつかしきを、などか我思ひ

のあらはれんと思ふ、師の君のを聞かせ給へといへば、少し打ゑみ給ひて、靜に指を下し給ふ。妙なる音のひびきそむるよと思ふやがて、ピアノもピアノひく人も見江ずなりぬ。只神の御前にて、神の御聲きくらんやう思はれつ。いはん方なく美しう清くたふとき御聲よと聴き入りたる時、我心は嬉しとも悲しとも、何ともわき難うなりて、其響の消江ゆく方に、我も消江ゆくかとのみおぼ江つ。終のアツコルドは夢うつゝの境より我をかへしぬ。さらば次の金曜にはとて、立ち給はんとす。西の窓かけのひまより、夕日赤うさし入りて、片への白き壁に、師の御姿ほのかに畫き出されつ。やがて師も人々も皆歸りまして、我一人となりぬ。さても我心をそらになしつるかの調べよ、何ものゝ力なるらむ、ピアノよ、猶かの力汝が中にもりたるやと、そと寄りて、かつぐ指ふれて見たれど、あゝわがしらは、いつものごとく拙なくかひなく、はた悲しきしらべなりき。

【入力者注】

底本に行をあわせるために、半角スペースを挿入したり句読点のフォントサイズを小さくした箇所があります。

底本…佐々木信綱編「竹柏園集第弐編」

明治三十五(1902)年五月廿七日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年四月二十六日

改訂…令和四(2022)年九月十三日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。